

最近、頼まれたことがあって、あるオーディオ入門書を読む機会があった。

昨今は、オーディオ雑誌さえ読んでいないのでオーディオ界の動きにはついて行けなくなっているが、少しでもファンを増やさないとオーディオパーツがさらに入手しにくくなるであろう。その利己的な理由から、入門書はとても大切なものだと思っている。いつかは私も書いてみたいとも思うのだが、入門書と言うよりは、間違った道への案内となるにちがいない。やっぱり、止めておこう。

本の内容についてどうこう言うことはない。が、“オーディオ界で言われていることのウソとマコトを区別する”と自信満々に書かれているのを読むと、ついついツッコミを入れたくなくなってしまった。その本の筆者氏に面識も恨みも恩義もないし、また、面識もない他人がどう言おうと、まったく気にならない。我関せず、である。どこの誰かも知らない人が、何と言おうと、その意見で自分の判断が変わることはない。

私には、自分で聞いたことがないのに、音が良い／悪いと決めることはできない。であるから、知らない他人の判断は、私にとってはどうでも良いことでしかない。

もともと、25年くらい前までは、私もオーディオ雑誌の評価を読み、評価の高い機器を購入していた。で、雑誌（まだネットのない時代である）にすばらしい評価を得ている機器を購入し、落胆したことは一度や二度ではない。その体験などから、他人の評価を信じなくなっただけのことである。

であるから、その書名や著者名を記すことは控えておく。その考え方についてツッコむ。

その突っ込みポイントであるが、著者氏は“音量を上げないと音の判断ができない”と考えているらしい。以下に、3カ所ほど引用する。

「・・・普通のユーザーの狭い部屋で音楽を楽しむには、せいぜい数ワットの出力で十分であり、非常にわずかな違いまで識別できる数十ワットもの音量を出すことができないので・・・」

「家族や隣近所の迷惑を考慮して、おそろおそろ音量を上げる程度のレベルでは、いかに「違いがわかる」という人でも、判断はつけにくいものだ。」

「・・・音量についても、人間の耳には「分解能」のようなものがあり、ボリュームを大きく上げると、音の違いもわかりやすい。」

著者の実体験として、音量を上げないと音の違いがわからなかったことがあるのだと思うし、その体験についてどうこう言うつもりもない。しかし、自分が違いわからなかったから、誰もが音量を上げなければ音の違いがわからない、と結論するのは稚拙である。

私自身は、たとえば、ふだん聞く音量は“数ワット”の下の方、まず3ワット入れることはない。スピーカの能率は、カタログスペックで88dB/W。そう低い方ではないだろう。“普通のユーザーの狭い部屋”であるから、二桁ワット入れることはない。“家族や隣近所の迷惑”を考慮しているのではないが、単に大きな音量を必要としていないだけである。おそらく著者氏が言う“おそろおそろ音量を上げる程度のレベル”であろう。これで“非常にわずかな違い”が識別できないのであればありがたいのだが、“非常にわずか”

でない違いだけで、私はいっぱい悩まされている。

おそらく著者氏は、A と B の比較をして、

・小音量では A と B の違いがわからない → 大音量では A と B の違いがわかった

あるいは、

・大音量では A と B の違いがわかった → 小音量では A と B の違いがわからなくなった

経験があるのだと推測する。

しかし、私の場合、音量を上げて判断が変わった経験がない。

・小音量では A と B の違いがわからない → 大音量でも A と B の違いがわからない

・小音量で A と B のどちらが良いか判断できる → 大音量でも判断は変わらない

である。

“人間の耳に「分解能」のようなもの”があるかどうかは知らないが、ノイズに埋もれてしまうほどの小音量でなければ音の違いはわかるものであるし、音量を上げなくてもわかるものである。私の経験から言えば。であるので、音量を上げて「分解能」に達しないとわからない、との著者氏の考えには賛成できない。

いささか例としては不適切かもしれないが、ざわざわとしたお店に流れる BGM が、天井スピーカか、天井からぶら下がった小型ボックスから流れているのか、もちろんスピーカは頭の後方で鳴っている状態で、区別できる。これは種を明かせば簡単で、バスレフのボコボコする音があるかないかで区別している。

たしかに、細部を聞くにはもう少し S/N が必要である。が、お店の中が静かであれば、音量としてはそのくらいあれば、結構な違いがわかる。少なくとも、会話の邪魔にはならないくらいの音量である。著者氏の言うところの“おそろおそろ音量を上げる程度のレベル”にも満たないであろう。

ただし、スピーカのダイナミックレンジがどのくらいかを聞くのであれば、それは直線性が悪化するくらいの音量が必要である。

さて、この著者氏の経験に基づく断定も私にはどうでも良いのだが、この断定の上に積み重ねられている著者氏の主張を読まされると、バカバカしくて最後まで読む気が失せてしまった。

著者氏は、音量を上げられるメーカーの試聴室ではわかるような違いは、(音量を上げられない) ふつうのユーザーにはわからない。ふつうのユーザーにはわからないから、(たとえばケーブルの違いなど) 気にすることは無い、と持論を展開している。

この本を読んで納得する読者であれば、それでよい。というより、疑問を持たない方が幸せに音楽を楽しめるに違いない。

であるが、もう少し音が良ければもっと音楽を楽しめるのに、あるいは、装置の音が悪いのを何とかしたいと思うマニアには、不幸な入門書である。そもそも、このように読者をバカにしている記述をチェックできない編集者も問題であろう。ちなみに出版社は大手である。

著者氏のウソとマコトの区別の仕方は、著者氏が納得できる説明があるかどうか。でしかない。私が読む限りは。もちろん、著者氏のように理論的に音の良し悪しを考えて、それで断定できるマニア氏が少な

くないことは知っている。理論的に納得できないことは、違いがあるはずがない、と決めつけられれば簡単である。と、いつも思っている。そう決めつけて、その決めつけに疑念が湧かないのであれば、頭で考えただけで試聴する手間を省くことができる。けれども、私の悪い頭で考えた結論には、まあ、少なく見積もっても3割くらいは、私の耳が「間違ってるよ～」とダメ出しをしてくれる。端的に言えば、良いと考えて試すのであるが、結果は良くなるどころか悪くなるのが少なからずある。この経験も積み重なり、私は、頭で考えただけでは結論に至れないでいる。

著者氏はウソとマコトにいろいろと論拠を並べられているのだが、著者氏の納得のできることだけをマコトとされており、理由を考えられないことをウソとされているのであって、著者氏が考えついた範囲だけで結論を決めている。

まあ、私の本音を言ってしまうえば、音を聞いて比較されている方とは思えない。たとえ聞かれたとしても、聞く前にすでに結論を得ているのであろう。

そもそも、音の良し悪しを理論的、すなわち物理現象でもって説明できるのなら、音の良し悪しを理論的、すなわち物理特性でもって計測できるはずである。残念ながら計測できるのは周波数特性とひずみ率くらいなものであって、どちらも音の良し悪しではない。

ただ、筆者氏はひずみ率が小さい方が良い音と考えているらしい。物理特性の悪さをもって真空管アンプは「独特のクセのある音」を作り出すとされているが、どのように“クセ”が聞こえるのかは一言も述べられていない。「本来のクリアな音」ではないのだそうである。が、そもそも、どのような音が“本来のクリアな”音なのかも記されていない。

著者氏は、200個のトランジスタからhFEを選別してすばらしい音のアンプを作ったそうだが、しかし、ひずみ率が小さくなると、どのように音が良くなるかについては一言も記されていない。もしも音が違うと感じられたのなら、どう違ったかを体験されているはずである。であるなら、どのように音が良くなるのかを述べて欲しいと思う。

何を隠そう私も、100個のトランジスタからhFEを選別してアンプを作っていた。ところが、ある日試すと、選別しないで作ったアンプとの違いが聞こえなかった。今ではhFEを選別しないでアンプを作っている。当然、同じ回路で倍以上ひずみ率が異なることもある。断言するが、その程度では、まったく音の差は感じられない。トランジスタの銘柄を交換する方が、はるかに音を変える。

あるいは、ひずみ率で選別されたP社のD/Aコンバータを、最高ランク（クラウンマークが印刷されていた）とノーマーク品とを買って比べたことがある。この時も、音の違いは聞こえなかった。

20年以上前のことなので白状するが、設計の間違いで、アンプが1.5%ものひずみ率となっていたこともあった。さすがにこの時は音色の違いが感じられたが、ひずんでいるとは、測定するまでわからなかったし、何人かの友人にもそのアンプを聞かせたが、誰一人、ひずんでいることを指摘した者はいなかった。（いわゆるスイッチングひずみが発生していた。ひずみをなくした状態と比較して、軽いような、ハイ上がりのような、キシキシするような感じの音に感じられた）。

以上の経験から、ひずみ率で音の良し悪しは語れないと結論している。であるから「hFEを選別」したから音が良い、との主張をする人は選別しなかった音と比較したことがないのだと思うし、もしも比較した

ことがあるのなら、どのように音が良くなったかをコメントできると思うのである。

白状してしまえば私自身、100個のトランジスタから hFE を選別してアンプを作っていた頃には、選別しなかったアンプの音と比較したことはなかった。

あるいは著者氏は、スピーカシステムではパーティカルツイン方式を、音源が中心に集まっているから良いとされている。が、平面方向については語られているのだが、その割には、奥行き方向の時間差およびネットワークに起因するひずみについては何も記されていない。これらの違いを考えつかなかった、あるいは知らなかったから考慮に入れないのだろうし、考えつかなかったからウソかマコトかの判定にも一顧だにしないのであろう。おそらく論調からすれば、ウソだと考えつかれたのなら論理的に無視すべきことを主張されていると思われる。それが記されていないのだから、この点に何も考えがおよばなかったのであろう。

ところが私にとっては、パーティカルツインであるよりも、音源の奥行き方向のずれ、およびネットワークに起因するひずみの方が、はるかに重要な要素である。私の場合には少々おかしいのであって、2次以上のネットワークが使われていると音源が別れているように感じていた（今は、この種の音の違いを覚えてしまったので、フィルタの音と識別する）。もっとも、私のように感じる人は少数派であり、多数派の人はひずみとは感じないことも知っている。

理論的に2次以上のネットワークは波形をひずませるし、音源位置が異なれば、耳への音の到達時間差が生じる。いたがって、これも波形ひずみの原因となる。しかし、これらはトランジェントな状態での話であり、連続波を使用する高調波ひずみ率としては観測されない。であるから、ひずみ率が重要と考えているのであれば考慮する必要もなくなる。したがって、著者氏は検討されていないのかもしれない。

いずれにしても私の経験からは、大音量であるか小音量で再生するかはポイントではなく、ふだん聞く音量で違いがわかるかどうかの問題である。そして、聞いて比較するかどうか、言い換えれば、聞かないで決めつけて安心していただけるかどうか、がさらなる問題である。

もちろん、聞かないで、考えただけで納得できるのならそれが一番良い。“こっちを試した方が音が良くなるのでは？”との邪念にまどわされては音楽を楽しめない。

けれども修行が足りない私は、悟りの境地に至れない。試聴によって邪念をひとつひとつ振り払うしか方法を知らない。やっかいである。そして、他人にも試聴して確かめようと呼びかけている。こちらの方が、もっと害毒をふりまいているのかも…。